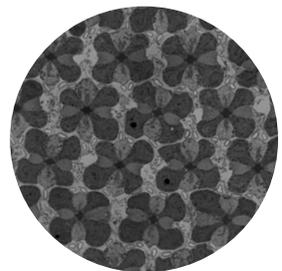
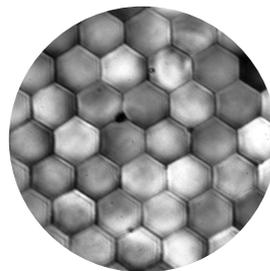


チョウの視覚世界を探る

昆虫に色が見えるかどうかを最初に調べたのは、オーストリアの動物学者、カール・フォン・フリッシュである。彼は、色紙の上でミツバチに蜜を与える実験で、ミツバチに色覚があることを見事に証明した。驚いたことに、ミツバチには紫外線が見える代わりに、赤は全く見えていない。フリッシュ以来、これが昆虫の一般的性質だと考えられていた時期は長いのだが、実は赤が見える昆虫も多いことが分かってきた。アゲハやモンシロチョウはその代表である。チョウの複眼を細かく調べてゆくと、ふたつとして同じ眼をもった種は無く、雌雄で異なるものも少なくない。



その多様性には驚かされるばかりである。チョウがどんな世界を見るのか、その能力がどう進化してきたのかを考える。



2013年**2月27**日(水) 16:00～17:30

慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎1階シンポジウムスペース

参加費：無料（学生の来場歓迎）

会場準備の都合上、塾外の方は事前申し込みをお願いいたします



講師：**蟻川 謙太郎**氏

◇総合研究大学院大学先導科学研究科教授

1957年生まれ。自由学園最高学部卒。上智大学大学院修了。専門は神経行動学。修士1年の冬にアゲハがお尻で光を感じることを発見、この研究で理学博士。83年横浜市立大学文理学部助手。同大助教授、教授をへて、06年より現職。この間、オーストラリア国立大研究員、アメリカNIH研究員、JSTさきがけ研究者など。一貫して昆虫光感覚の研究を続けている。著書に「いろいろな感覚の世界（学会出版センター2010年）」、「見える光、見えない光（共立出版2009年）」ほか。趣味はフルート演奏とネイチャーフォト。

